

1年の締めくくりに元気に餅つき 達生賞創設で金澤看護師が受賞

平成29年を締めくくる恒例の餅つきが12月27日、城西病院の旧玄関前で行われました。

もち米は約40キをを用意し、職員が交代で杵を振り下ろし、みるみるうちにつき上げていきました。城西病院院内託児所から子供たちも駆け付け、職員と一緒に杵をふるって餅をついたり、つきたての餅をほおぼったりしていました。出来立ての餅は女性職員が集まって、鏡餅、きな粉餅、あんこ餅、辛み餅、伸し餅にして、各職場に配布しました。

翌28日は、リハビリ室に職員が集まり仕事納めで多田正毅理事長が「達生堂になって1年半、改めて達生堂の意味を確認したい。そして、今年のいいことは残し、悪いことは捨て、来年はいいことだらけで、がんばって行きましょう」とあいさつしました。白石裕比湖院長が、ショートステイみぶの杜のオープン、日タイ修好130周年記念式典などこの1年を振り返り、「来年も頑張りましょう」と話し、3本締めの手拍子で今年を締めくくりました。

今年から、素晴らしい功績を挙げた職員に対し、『達生賞』を創設。その第1号の受賞者として、看護部の金澤理英子看護師を表彰しました。金澤看護師は、今月下旬、腰痛で外来に訪れた70歳代男性の病状が急変したのにいち早く気づき、医師に連絡。男性を診察したところ、腹部大動脈破裂と分かり、ドクターヘリを要請。ドクターヘリで筑波大学病院に搬送し、手術の結果、快方に向かっているということです。金澤看護師の的確な判断と措置に対し、白石院長が達生賞の表彰をしました。

平成28年12月28日



達生賞を受賞した金澤理英子看護師(中央)

